

小友沼は、1675年に完成した55ヘクタールの人工のため池である。久保田藩（現秋田県）の大名であった佐竹義宣（1570～1633）の命を受けて造成され、干ばつ時の灌漑として建設された。現在小友沼には、毎年数十万羽の渡り鳥が集まる。

1998年に、鳥獣保護区に指定された。この沼地は、10月から3月の間にシベリアとの間を行き来する渡り鳥にとって、とても重要な経由地である。渡り鳥たちは、沼地とそのまわりの水田で休息をとり、餌を食べる。その様子は、特に希少種が見られるときには、この地域やその周辺の野鳥観察家や写真家たちを惹きつける。

移動の季節のピーク時には、20万羽ものマガンと1万羽の白鳥が見られる。その他定期的にやって来る渡り鳥には、アマサギ、ホシハジロ、オジロワシ、ヒシクイ、カンムリカイツブリ、ヨシガモがいる。

小友沼の最深部は2メートル弱である。沼の水位を保つため、近くの米代川から水が汲み上げられる。

貯水池の一部には遊歩道が整備されており、沼地全体を一望できる見晴らしの良い展望台もある。駐車場の近くには、ベンチ、トイレ、噴水のある芝生のピクニックエリアがある。

駐車場は無料。JR 東能代駅から小友沼まで、徒歩約20分である。